

一 般 演 題

1. 骨並びに ^{67}Ga シンチグラムにて多数の骨病変を認めた非定型抗酸菌症の 1 例

松木 和彦		(国療宮崎東・放)
田中 雅之	比嘉 利信	井上謙次郎 (同・内)
星 博昭	二見 繁美	大西 隆
長町 茂樹	陣之内正史	渡辺 克司 (宮崎医大・放)

非定型抗酸菌症の報告例の多くは肺感染症であり、全身播種型は稀である。さらに、その骨病変のシンチグラムによる報告例は極めて稀である。今回、骨並びに⁶⁷Gaシンチグラムにて多数の骨病変を認めた全身播種型非定型抗酸菌症の1例を経験したので、若干の文献的考察を加え報告した。症例は31歳の男性で、全身骨に融解病変を有し、骨並びに⁶⁷Gaシンチグラムにて同部にRI集積像を認めた。悪性疾患との鑑別が困難であったが、骨生検にて診断確定した。

2. $^{99m}\text{Tc-MDP}$ の腎排泄について

中別府良昭 宮園 信彰 西元 英東
(国療南九州病院・放)
中條 政敬 (鹿児島大・放)

$^{99m}\text{Tc-MDP}$ は骨イメージング製剤として、広く使用されている。またこの製剤は、比較的速やかに腎より体外に排泄される。このことに着眼し、10例の骨シンチ検査目的で臨床的に腎疾患を有さない患者に対し $^{99m}\text{Tc-MDP}$ を 740 MBq (20 mCi) 静注後40分間腎動態シンチを行い、レノグラム (T_{\max} , $T_{1/2}$, $T_{2/3}$) と 2-3 分後の摂取率を得た。それらは、対照群（腎障害（-））の $^{99m}\text{Tc-DTPA}$ によるレノグラムと摂取率に近似していた。10例中2例に明かな排泄遅延と摂取率の低下が認められ、1例は心疾患、他方は慢性肺気腫を合併していた。骨シンチ時の、早期腎動態シンチグラフィは、腎や心循環器についての情報を含み、これらの診断に使用できる可能性があると考えられた。

3. 腰椎転移の骨シンチとMRIによる評価

鍋島 光子 富口 静二 原 正史
 古嶋 昭博 木下 留美 大山 洋一
 大田 千秋 高橋 瞳正 (熊本大・放)

腰椎への骨転移を認める13症例につきMRI所見にて骨転移のない椎体をType 0, ある椎体をType IからIVに分類し、骨シンチの異常集積程度との関連を検討した。

MRI の TI 強調画像で椎体の一部が低信号を呈するもの (Type I) のうち約 40% は RI の集積を認めなかつた。MRI で椎体全体が低信号を呈するもの (Type II), 椎体外進展を認めるもの (Type III), 圧迫骨折を伴うもの (Type IV) は RI の集積を認める割合は 83%, 92%, 100% と増加するが軽度集積の程度は 0%, 18%, 33% であった。骨シンチでは椎体の部分的な転移は検出できない場合があり、椎体外進展を認める骨破壊の程度が強いものでは集積程度は低下する傾向であった。

4. CT や Echo で発見された副腎(部)腫瘍に対する副腎皮質シンチグラフィの検討

中條 政敬 岩下 慎二 田之上供明
野口 一成 中別府良昭 (鹿児島大・放)

CT や Echo で偶然に、また腹部症状を有する患者や担癌患者で発見された副腎(部)腫瘍に対する ^{131}I -アドステロールによる副腎皮質シンチの有用性について検討したので報告した。対象は確定診断の得られた27例である。良性副腎腫瘍のうち silent adenoma 7 例はすべて hot nodule を呈した。その他の良性副腎腫瘍 9 例は正常、集積低下、部分・完全欠損像のいずれかを呈した。悪性副腎腫瘍 6 例は不均一摂取、集積低下、部分・完全欠損像のいずれかを呈したが、これらのうちコルチゾール產生癌 2 例では特異的所見を示した。副腎外腫瘍 5 例では正常、位置異常像のいずれかを示した。副腎皮質シンチは CT・Echo 発見副腎(部)腫瘍の副腎内・外および良・悪性の鑑別に限界はあるが有用と考えられた。